

English Translation of Claim of JP-S54-10033-A

Laid-Open Publication number: S54-10033 (No.10033 of 1979)

Laid-Open: January 25, 1979

Application number: S52-74981 (No.74981 of 1977)

Date of filing: June 23, 1977

Applicant: Yokota, Shukou

Inventor: Yokota, Reiko

Yokota, Shukou

Title of invention: METHOD FOR PERMANENTLY PRESERVING LIVING
FLOWERS OR LEAVES

Claim 1

A method for permanently preserving living flowers or leaves, characterized in that living natural flowers or leaves are treated with an water-soluble organic solvent such as N,N-dimethylformamide to remove water and a part of tissue, and then a polyethylene glycol is contained in the flowers or leaves instead of the removed water or tissue.

⑩日本国特許庁

⑪特許出願公開

公開特許公報

昭54—10033

⑫Int. Cl.²
A 01 N 3/00

識別記号

⑬日本分類
119 E 35

厅内整理番号
7142—4H

⑭公開 昭和54年(1979)1月25日

発明の数 1
審査請求 有

(全 3 頁)

⑮活きた花、葉の永久保存処理方法

⑯発明者 横田周弘

茨木市美沢町17の10

⑰特 願 昭52—74981

⑰出 願 昭52(1977)6月23日

茨木市美沢町17の10

⑱発明者 横田礼子

⑲代理 人 弁理士 溝上満好 外1名

茨木市美沢町17の10

明 紹 書

1.発明の名称

活きた花、葉の永久保存処理方法

2.特許請求の範囲

(1)、自然の活きた花または葉に対し、ヨウジメチルホルムアミドなどの如き水に可溶性の有機溶剤を用いて脱水と一部脱組織化処理を行つた後、脱取した水分と組織の一部に代えて花または葉にボリエチレングリコールを含ませることを特徴とする活きた花、葉の永久保存処理方法。

3.発明の詳細な説明

本発明は、自然に成育した観賞用の花や、木の葉などの如き花や葉類を、その活きた自然状態の感触をもつたままで枯らすことなく永久に保存できるようにする花、葉の永久保存の処理方法に関するものである。

例えば押し花とかいわゆるドライフラワーと称する保存のまく観賞用花は、絶て活きた花や葉の水分を急速に脱取して作られている。そのためには

保存はさくが、ボリューム感がなくなつて薄っばらな上に、かさかさしたいかにも生氣のない造花の感じを与える欠点がある。

そこでこれら花や葉類を、水分を与えることなく活きた自然の生氣ある状態で永久に保存することが望まれている。

本発明はそのような要請に応え得る活きた花、葉の永久保存処理方法を容易に提供せんとする目的でなされたものであり、その特徴とするところは、活きた花または葉に対し、ヨウジメチルホルムアミドなどの如き水に可溶性の有機溶剤を用いて脱水と一部脱組織化処理を行つた後、脱取した水分と組織の一部に代えて花または葉にボリエチレングリコールを含ませる処理方法に係るものである。

すなわち、本発明は第1段階として、所要の花または葉に対して脱水と一部脱組織化を行う。

この水分を脱取する脱水剤としては、水に可溶性の有機溶剤を用いる。有機溶剤の中でも水分以外の葉緑体、花青素なども同時に脱取する目的で

・例えばヨーロピアンホルムアミド($\text{HOOC}(\text{CH}_2)_2$)を用いるのが好ましい。特に葉に対しても、葉緑体の存在は経時による変色の原因ともなるので取り除く方がよい。

次に第二段階として、前記により脱取した水分と組織の一部に代つてポリエチレングリコール(主に400番、 $\text{HOOC}(\text{CH}_2)_n\text{OH}$ 、 $n=7 \sim 9$ 、平均分子量380~420を使用する。その他4000番、6000番も適当に併用する)を前記で処理した花や葉に含ませるものである。

このように、脱水と一部脱組織化処理を行つた後でポリエチレングリコールを含ませた花や葉は白色か半透明のものである。これらの花や葉は風乾し、そのままでもよいが、既知の方法によつて適当に色付を施し或いは肉付をしその体裁等を整える。また布や紙、或いは針金等と組合わせて、より美的な組立や組合わせ加工を施すことによつて観賞用、装飾用に最適なものとなる。以下本発明方法の実施例につき説明する。

なお、乾燥はその時の気温、湿度により異なるが、約10日間を要する。

以上がカーネーションの花に対する実施例であるが、それ以外の花、例えばヒヤシンス、ハイビスカス等の如く花弁が比較的丈夫な花に対しても、この方法は有効であることが確認された。なお、上記のカーネーションは製造後既に数ヶ月を経過しているが、未だに変色、褪色、枯れ、しづみがなく、処理以前の活きた状態であつて、自然の花と区別がつかない。

2 対象 いちょう、もみじの葉

いちょう、もみじの葉の発芽後比較的若い葉(葉緑体がまだ十分固定されていないもので、5~6月頃採取のもの)を前記と同様にヨーロピアンホルムアミド液に浸漬して脱水、一部脱組織化の処理を行つた後、花と同様にポリエチレングリコールとメタノールの混液中に浸漬してから引き上げて風乾した。これで半透明で緑色のない葉が出来た。この場合葉脈、葉の模様などの特徴を生かし半透明のままでも良いのであるが、緑色の

1 対象 カーネーションの花

先づ市販されているカーネーションの花において、がくを含む花と莢との部分を切断する。これは花と莢とは後述する処理時間が異なるためである。切断した花の部分(がくとも)をそのままヨーロピアンホルムアミドの液に浸漬し、該液を徐々に温めて液温が60℃になつたら熱源を切り、花を取り出し、メタノールで洗浄する。これを直ちにポリエチレングリコールとメタノールの等量混合液に約10時間浸漬する。この場合メタノールはポリエチレングリコールの希釈剤として用いたものである。その後該液から引き上げてしづくを十分に切り自然乾燥させる。なお、莢は花よりも長時間処理(約花の10倍)する。

かく処理することによつて白色のカーネーションが出来上る。処理以前の元の花の色が何色であつても白色となる。がくの部分も脱色されているので緑色の色素を前記ポリエチレングリコールとメタノールとの融液に溶かしたものと適當な手段で塗布することによつて、再び元のがくができる。

色素又は顔料、充填剤等によつて所定の色付けをして不透明化を行えば、天然色そのままの葉が得られ、各種の用途に供し得られる。

以上のように本発明方法は、一般に観賞用に適する花や葉類に前記処理方法を施すことによつて永久保存のできる活きた自然の状態として提供できるので、従来の生花の如く短期間で枯れ、しづみ、生氣の消失などの現象がなく、しかも水分も不要であつてそのままで長期保存ができる観賞用に最適である。

特許出願人 横田信弘

代理人 清上清好

(権利1名)

手 続 補 正 書 (自発)

昭和 52 年 7 月 30 日

特許庁長官 殿

1. 事件の表示

特願昭 52 - 74981

2. 発明の名称

活きた花、葉の永久保存処理方法

3. 補正をする者

事件との関係 出願人

住所 大阪府茨木市美沢町 17 の 10

氏名(名称) 横田 周 弘

4. 代理人

住所 大阪府大阪市西区朝本町 1 の 10 の 4

氏名 (6082) 弁理士 溝上 满 好

5. の日付 昭和 年 月 日

6. 補正の対象

明細書 (発明の詳細な説明の裏面) P2-2

7. 補正の内容 別紙の通り

特開昭54-10033(3)

補 正 の 内 容

明細書第4頁第19行目に「陳液」とあるを、

「混液」と補正する。